道徳的行為や社会的幸福の基本となる茶道の伝統的な理念

調和と平和（和）
崇敬 / 尊敬（敬）
純粋 （清）
静穏 / 静止 / 平静 （寂）

「美」と「道徳」の表れは、厳粛さ、温かさ、純粋さ、そして平和な心の表れです。茶道はこれらの行為を身に付けるための自己鍛錬を成す一つの手段です。道徳的な教育への非宗派的、しかし、精神的な取組みを提案しているバハーイ教徒国際団体の発言に‘人類の団結は、私たち自身の文化遺産の研究と、全人類を特徴づける普遍的な資質の探検とのバランスを導く’とあります。

現在の一流の茶道大家である鵬雲斎の考えは上記の考えに一致しています。彼の夢はできるだけ多くの人々に教えられるであろうし、安らぎはおそらく一杯のお茶から生まれるでしょう。

参考文献

MEXT. (1989). *The Course of Study, Elementary School.* Tokyo: Japan Ministry of Education, Culture, Sports Science and Technology.

Yanagi S. (1989). *The Unknown Craftsman, a Japanese Insight into Beauty*, Adapted by Bernard Leach. Tokyo: Kodansha International.

日本文化の精神性

角井宏

1. 日本神道の本質（万神霊信仰）

日本神道の核心的理念は、全国各地の多くの神社の祭神として祭られている「素佐之男命」が日本神話の中で発した言葉「清く明るき誠の心」に象徴されていると思う。つまり、何事も包まず隠さず、誠意をもって万神霊に対するという、信仰である。原始的には無社無宰で、やしろ以前に神のよりしろがあり、祭主は大王（天照大神や神功皇后のようなシャーマンに降霊・彼岸と交信すると信じられていた。

参考　天地の初めて開けしとき、高天ケ原に成りませる神の名は、天之御中主神、
次に高御産巣日神、次に神産巣日神。並独り神成りまして身を隠したまいき。
次に国稚く浮かべる脂のごとくにして、クラゲなす漂える時に葦牙の如萌え騰がる物によりて成りませる神の名は、宇麻志阿斯詞備比古遲神。次に天之国営立神（独身隠身・古事記）

2. 夢幻能

１４世紀中葉大和猿楽に観阿弥・世阿弥という天才が現れ、猿楽の物真似を創作劇化して面目を一新した。観阿弥は、曲舞を取り入れ、クセという小段を作り、「卒塔婆小町」、「通小町」のような作品を残した。

世阿弥も「花筐」、「山姥」、「班女」、「砧」、「融」、「高砂」、「忠度」、「清経」、「井筒」のような名曲を残した。「井筒」は、在原廃寺で、旅僧が月夜に業平と紀有常女の深い恋物語を聞くという筋だが、そのかたり手は有常女の霊であり、夢幻に終る夜明けの情感を彷彿とさせる代表的な夢幻能である。

3. ポール・クローデルの観劇記(道成寺)

能は、構えや形をすべて単純化し、動きを単純化し、動きを緩慢にする。動きは、絶えざる繰返しと緩慢さにより、極度に重要な意味を帯びる。想像力と意志の訓練一時間余、精神は釘付けになる。例えば柱の傍らに座った僧が、自分に向ってくる吸血鬼を凝視し続ける。楽士の咆吼。爪先が上がる。鼓を打つ。爪先が下りる。静まり返る。突如全身を折り曲げる。飛びかかろうとするかのように。再び静寂。長い不動の間。かようにして舞台一巡に一時間。実に劇的。—この間見つめる方は、文字通り瞬き一つせずに不動の姿勢を保つ。一私は誘惑の突然の襲来を、悪魔との長い孤独の戦いを、迫り来る危機と死とに耐えている、(ポール・クローデル「道成寺を見て」)

能は、観客に緊張を要求する精神劇である,

4. 聖徳太子の「和」

聖徳太子は、世界の争乱紛擾の転換期に現れ、神仏一体・王法一如を強調して、わが国に平和を確立する方法を教えた。その基本が十七条の憲法で、冒頭第一条に衆議をつくして平和の樹立を求めるべきこと、第二条に道義の乱れを世界宗教である仏教に学ぶべきこと、第三条に承詔必謹、最後は皇命に服すべきことを命じた。

その上で、礼の尊重・絶餐棄欲・勧善懲悪・賢哲登用・群卿早出・絶忿棄瞋・信賞必罰・勿収斂民・勿妨公務以非聞・勿嫉妬・背私向公一勿使用繁民・必宣論与衆　など平和の樹立に必須の具体的心得を示している。

仏教とバハイ信教についての パネル・ディスカッション

バハイと仏教

シュエリン公子

今日の日本において、現代社会に発生するさまざまな社会的、経済的、倫理的な問題を鑑みるとき、個人や国家や世界社会がいかに精神的支柱を必要としているかを考えさせられます。そこで本日は仏教国である日本にいまだ知られぬバハイの存在とその精神的に斬新な教義をこれからの日本社会の精神的支柱となるものとして考えるための資料を提供したいと思います。

仏教はインドネパール地区に発祥し、2500 年間主としてアジア地区で信仰され、地球人口の約 5 分の 1 の信者を持ち、その平穏と安らぎの生き方は東洋の心に深い影響を与えてきました。

日本でも 1400 年前の紀元 594 年に推古天皇の下、聖徳太子が仏教を導入して以来、仏教は日本人の精神的骨子の一環となってきました。

バハイは人類が地球社会に突入しようとしていた 19 世紀後半にペルシャのシラズ及びヌール地方に発祥し、1844 年の発祥以来 163 年の間に世界 210 カ国に広まり、182カ国に行政組織を持つに至った世界宗教でその教義と実践においてこれまでのどの宗教にも見られない国際性を持つた精神的、社会的教えを持っています。この二つの宗教を私が、拙学ながら比較し考察したことをここに述べさせていただきたいと思います。

バハイ信教の聖典に見られる仏教については、二人の顕示者、バハオラとバブは特に仏教について言及していません。この理由はその信徒に仏教者がいなかったためであるとバハイ信教の守護者は述べています。バハオラの長子で信教の中心と呼ばれたアブドル・バハは“仏陀はキリスト、モハマッドと並ぶ神の顕示者であった”こと、“バハオラは仏陀ほか、これまでの顕示者の再来であり、彼らが予言したことを成就する顕示者であった”ことを明言しています。

このパネルにおいては仏教の中心的教えとその予言、仏教とバハイの類似点、および相違点について考察し、類似点については、顕示者としての共通点、教えの普遍性、神の概念、死後の生、代表的な精神的教え、また、相違点については輪廻、黄金率、使命の違い、救済の対象の違いなどの観点から考察したいと思います。また、仏教とバハイとの関連などを通じてバハイと仏教がいかに一体性を持つかということと今、仏教界に新し